

「2009 年度全国大会速報論文特集」にあたって

宮下 和雄 (産業技術総合研究所, 2009 年度全国大会プログラム委員長)
 西田 豊明 (京都大学, 2009 年度全国大会委員長)
 山口 高平 (慶應義塾大学, 編集委員会委員長)

人工知能学会の会員が年 1 回集う重要な場である全国大会は、会員のさまざまな研究の第一報が報告される場としても重要な位置づけをもっている。また、全国大会で発表される論文の中には制限ページの 4 ページを目いっぱい使い、新規性も十分高く、論文としての完成度も高い報告もかなり見受けられる。一方、全国大会の各セッションの座長・評者は当該の話題の専門家であり、広い知識と高い見識を有していると考えられる。全国大会での発表をより活発で動機づけられたものにするには人工知能学会にとって重要であり、理事会でも学会活性化の検討事項の一つとしてしばしば議論されてきた。

2009 年度の全国大会から実施された速報論文推薦制度は、全国大会で発表された論文の中から、速報論文にふさわしいと考えられるものを座長・評者の推薦に基づいて、プログラム委員会が選出し、著者に速報論文としての投稿を促すとともに、編集委員会に推薦することにより、全国大会への論文投稿の動機づけを高めるとともに、論文誌への投稿を活性化し、学会全体として研究の育成を図ることを目的としている。

全国大会において従来から実施している「大会優秀賞」では、大会当日での発表内容を重視した選考を行って表彰する一方、速報論文推薦では、全国大会への投稿論文の中で完成度の高いものを、速報論文として論文誌に投稿することを推薦する。本特集は、速報論文推薦によって選ばれた論文による初めての論文特集である。

速報論文推薦制度は始まったばかりであり、これからも漸次改良されていくと思われるが、2009 年度は以下のように実施された。まず、発表者は 1 月の発表申込み時に、速報論文としての推薦を希望するか否かの事前登録を行った。大会プログラム委員会は、登録結果を集計し、推薦を希望する発表が同一セッションに集中しないようプログラム編成を行った。2009 年の大会では、この時点での推薦希望件数は 29 件であった。

その後 4 月の論文投稿時に、発表者は速報論文推薦に関する最終的な希望を登録し、推薦を希望する場合にはアピール文 (学術的背景、課題、アプローチに関する簡潔な説明) を作成した。推薦を希望する論文に関しては、論文が発表されるセッションの座長、評者に速報論文と

して査読が依頼された。この時点で、速報論文への推薦を希望した論文は全 399 件の発表件数のうち 42 件であり、ページ数などの規定を満たして実際に査読対象となった論文は 38 件であった。6 月の大会前には査読者からの査読結果を集計し、2 名の査読者双方が推薦可と評価した中で高い評価を得た 6 本の論文が速報論文として論文誌への投稿が推薦された。

大会終了後、推薦を受けた論文に対しては、大会における質疑応答などの内容を加味した論文改良に向けたコメントが査読者から送付された。その後、推薦を受けた論文は送付されたコメント内容に基づいて改訂された後、9 月に速報論文として投稿された。投稿された論文は編集委員会による再査読を経て、すべて採択に至った (1 件のみ照会后採録)。今回、推薦された 6 本の論文が論文誌に投稿されてから採択までに要した日数は平均 66 日で、一般の投稿論文のケースよりもかなり短縮することができた。

試行錯誤でスタートした速報論文推薦制度であるが、2010 年の大会では、発表申込み時点の推薦希望件数は 59 件に増加している。速報論文推薦の趣旨に多くの皆様の賛同がいただけつつあることの証左であるとするれば、制度の立上げに携わった者としてこのうえない喜びである。

本学会の全国大会は、近年の景気低迷にもかかわらず、参加者数、発表件数が順調に推移している。2005 年第 19 回大会時は参加者数 489 名だったのが、2008 年第 22 回大会では 645 名にまで増加し、2009 年度の大会における参加人数は 622 名であった。速報論文推薦などの試みが、大会参加者への新たなインセンティブとなり、全国大会がますます活気に満ちあふれた議論、交流の場になっていくことを期待したい。

最後に、速報論文推薦制度を実現するにあたっては、山田誠二プログラム副委員長、船越孝太郎プログラム委員はじめ多くの全国大会関係者や、論文査読を担当いただいた全国大会の座長・評者や編集委員会の方々、趣旨に賛同して速報論文を投稿した著者など、多くの方々に議論を尽くしていただき、実施に協力していただいた。関係者各位に深く感謝の意を表したい。